

これからの宗教文化ミュージアムの展開

杉 本 憲 司

佛教大学宗教文化ミュージアムは、前身の「アジア宗教文化情報研究所」が文科省の特別研究費として認められ、さらにミュージアムとして成立してから10周年という節目の時にあたって、少し、今後の発展を見据えた感想を述べてみたい。

最近、各地で地域振興の為に、色々なイベントなどを中心とした催しものがふえてきたが、ここで一つ、地域のおかれた自然環境・歴史環境と一体となって、「佛教大学宗教文化ミュージアム」の発展を考えてみたい。

地域振興の中心となるものには、一つは自然環境としての「山」「川」「原」「林」「池」などがあり、歴史環境としては「史跡」「遺跡」「寺院」「神社」があげられ、その中につくられた「博物館」「美術館」「文化財資料館」などがあげられる。

近くでは、たとえば、奈良県を一つの例として考えてみたい。南には熊野・高野山の自然と、その中に存在する寺社は、世界遺産に認められるもので、それだけでもすぐれた歴史・自然環境をそなえている。北麗には紀野川が流れ、その間に「宮瀧遺跡」のような旧石器時代以後の重層文化財があり、更に北にいくと、橿原遺跡、飛鳥宮遺跡、藤原京遺跡などと、それに関連する遺跡。それらの間にある奈良県立橿原考古学研究所と、その附属博物館。奈良国立文化財研究所の附属博物館としての「飛鳥京陳列施設」など、名勝・自然文化財と、それに関係する陳列施設が密接につながって見学者によりよく歴史が学べるようにしている。

更に奈良盆地北部には、平城京がある。今日では、南の古い宮域と新しい平城京の間には陸路・水路の交通路がつくられ、今日では発掘・文献によって、それが復原されるまでいたっている。すなわち、奈良盆地全体が大遺跡であり、その間にいくつもの文化施設がつくられて、見学者に勉強できるようになっている。

奈良盆地の北部には、奈良時代の遺跡、寺院が集中してつくられていて、今日は一大歴史遺産地域になっている。都址としての平城京遺跡は、大平城京の中心である宮殿域で、今日、遺跡公園となっていて、宮殿などの建築の復原が行われ、その間に芝生がふかれた宮廷址がみられ、今日では歴史的な復原催しが行われたり、散歩をして歴史にひたる大公園になっている。まさしく歴史にひたる“イベント”広場になっている。遺跡の中心部を電車が横断する、めずらしい風景をみることができる。平城京の東側には、東大寺をはじめとする大寺院、宮廷と関係する「正倉院」があり、その間を縫って、今でも発掘調査を行っている。まさしく大遺跡群であり、その間に「奈良国立博物館」、寺院の寺宝を見せる展示館があり、本気で勉強しよう

としたら相当長期の滞在が必要となってくる。最近では、この大公園では多くのイベントが行われ、五感を楽しませてくれる。

奈良山をこえて北に入ると、いよいよ京都である。山脈の北側には、平城京をつくるための材木などを運んできた、木津川とその港としての木津がある。淀川から木津川にはいった木材などは、ここ木津港にはいり、更に山越えをして奈良の都に運ばれ、宮殿か寺院の建築材として使用された。

ここには、ごく短期間の都「恭仁京」がつくられる。更に北に少しいくと、京都府の文化財の陳列館がある。ここに南山城の京域と、今日の研究・陳列施設があって、地域研究の拠点であり、勉強の場になっている。

奈良街道を北にいくと、宇治につく。ここには宇治川岸に多くの文化財がある。その一つが「平等院」であり、世界文化遺産になっている。この地は宇治茶の産地としての産業と文化財と文学などの研究・学習をする施設と併せて、一大文化・産業・観光の面をそなえた地域で、観光・勉強の地としてまとまった地といえる。これからの地域文化を考えていくべき点で、今のところ最高の場所である。

宇治から北へ、京街道をたどっていくと世界での最大の文化財・産業・学問の地である京都市にはいる。洛中・洛外については「洛中洛外絵画の屏風」について知り、何回かの市内観光で京都の文化財にふれることができる。また世界文化遺産に認定されている「京料理」で舌を楽しませることができる。もっとも世界の人々に注目される世界の文化遺産で、目と口を楽しませてくれる最大の観光地であり、着物・織物・漆器・陶磁器などの文化的産業と産品が、また世界内外の人々を楽しませてくれる。生産・観光・文化財などが混合して世界内外の人に注目される地である。この地の北に佛教大学があり、学生はすぐれた文化の中で、勉学・研究につとめている。

大学の附属施設として、いくつかのものがあるが、その中でもっともすぐれたものである、嵯峨嵐山の地にある「佛教大学宗教文化ミュージアム」は、大学の附置機関として先述のように10周年をむかえるが、ここでこれが置かれている地と併せて、少しこれからの発展を考えていくための、一つの考え方をみてみたい。先に述べてきたように、これからの発展は、それがあある場所全体で考えていきたい。

洛西にいく道はいくつかあるが、ここでは金閣寺から西にいく道を中心に考えてみたい。少し西にいくと「府立堂本印象美術館」があり、ここの南側の立命館大学からは、道は「きぬかけの道」と称する文化財の多く存在する道になる。「等持院」・「龍安寺」・「仁和寺」と続き、宇多野にはいると、一般には余り知られていない、「近衛家」の文書館が北側の丘の中にある。ここから北へは「周山街道」で高雄にはいる。西にいくと嵯峨野にはいり、桜の名所にいたり、春には多くの人がおとずれる。ここをぬけて更に西にいくと広沢池であり、ここには江戸時代までは、遍照寺があった。広沢池は遍照寺の池であったが、今は寺は少し南に存在するのが、

わが佛教大学の「宗教文化ミュージアム」である。嵐山全体からいえば北東の隅であるが、ここから大覚寺・清涼寺などの大小の寺院が存在し、天龍寺などが代表とするものがある。寺の南には桂川(保津川)が西の亀岡から流れ、今は観光の川であるが、江戸時代は、丹波、丹後の物産が運ばれてくる水運の川で、角倉氏を代表とする京の大商人がこれを洛中に運んでいた。物の道の川から、今は観光の川になっている。

このような嵐山を中心とする嵯峨野全体を観光だけでなく、文化財の地であり、地場産業(竹細工品、土産物など)の地で、農業の地である。このような色々な面を持った地域の中で、わが「宗教文化ミュージアム」は、これら多くの性格とうまく一体化した場として発展していきたいと思う。今日は国・地方公共団体が、地域にある産業(衣食住)、文化財、研究機関を含めた「文化資源活用」の「国際芸術家村」を整備していく道が示されていくのに、わが佛教大学宗教文化ミュージアムもとりこまれて発展していく方向を考えていく必要がある。